

関西いのちの電話広報誌

No.104 号 2000 年 4 月 1 日発行

見出し案内

- * 四月に想う関西いのちの電話理事長酒井哲雄
- * 特集男性相談員による本音トーク「男のしんどさって？」
- * 第 18 回公開講座男のしんどさもわかってほしい

講師中村彰氏(メンズセンター運営委員会座長)

- * 認定式:感謝式行われる
- * 相談員ノート娘について思うこと 33 期 I.M
- * 自然に学ぶオジギソウ
- * 季節の俳句 - 十三句会より -

四月に想う関西いのちの電話理事長酒井哲雄

桜の花が咲き、幼稚園児が母親に連れられてやって来る。小学一年生は、真新しいランドセルを背負ってカタカタ音をさせながら、校門を掛けぬけて走って行く。校庭では元気な声が響きわたる。子どもたちは、中学・高校・大学へと進学し、若者は、実社会へと旅立つ。自然界の新しい息吹と共に、すべては希望に満ちあふれて船出をするかのようである。四月は、期待と不安が入り混じり緊張もあるが、いろんなことが新鮮に感じられてウキウキすることもある。四月とは、そういうものである。ところで、今、現実に迎える四月は、「残念ながら、そのようなものから程遠い」と思うのは私だけだろうか。確かに希望に胸を膨らませ、目を輝かせている子どもたち、ひたむきに生きようとする若者がいることを知っている。しかし、信じられないような出来事、異常な行動、モラルの乱れなどが連続し、社会の閉塞状況がつづく、果たして未来に開かれた社会はあるのだろうか、意識のどこかで憂いてしまうことも事実である。未来について、

つい先程まで楽観的であったかと思うと、いつのまにか悲観的になったりして、両者が絶えず交錯している。ある都立高校の卒業生の半数は、進学も就職もしない「フリーター」だそうである。周囲の大人はその選択を「甘い」と言う。本人は不安がないわけではないが、そこに希望を見出そうとしている。将来、この「フリーター」の中から、自らの道を切り開き、新しいライフスタイルを築きあげるものが出てくるかも知れない。しかし、今はそのことはさておき、「フリーター」の中に、現代社会に希望を見出せない若者の姿の一面が隠されているとも言える。問題の根はきわめて深く、しかも複雑である。小手先でどうこうできるものではない。しかし、子どもや若者たちが「未来」に生きることのできる社会創りを急がねばならない。空の澄みきった五月晴れの季節は、もうすぐそこまでやって来ているのだが。

特集男性相談員による本音トーク「男のしんどさって？」

とき 2月10日(木)18:30～22:30

ところ 5階第3会議室参加者5名(50代～60代)司会広報・編集チーム

リストラ、倒産、失業などの記事を目にしない日がないほど中高年男性を取り巻く状況は、依然厳しい。そして「経済苦による自殺」という最悪の結果をも招いている。「関西のちの電話」にも男性からの相談はあるが、現状からするとその件数はまだまだ少ない。「男は弱音を吐かない」「ガマンをする」などの価値観に縛られて、かけることをためらっているのではないか。そこで、男性相談員からその理由や解放されるための方法などについて本音で語ってもらった。かけがえのない人生を自分らしく生きるための参考にしてもらえたらと思う。

中高年を取り巻く環境

リストラの不安司:今、男性学といわれているのは、客観的、合理的、論理的なこと
のしんどさが心や体に出てきて、はじめて、こんなしんどいことをやめようかという声
ではないかと思う。基本的には、無自覚におしつけられてきたものに対する抵抗だと思
うがやはり、人間しんどいより楽な方が良いじゃないか。C:私の育った農家の場合
は特に非民主的。仕事は公務員。特に男女雇用機会均等法の関係で、前向きに取り
組んでいるつもりだがやはりでてくる。自殺については、日本の昔からの非民主的な
ところや、男としてのプライドを捨てきれないところからきていると思う。自分もプライ
ドを持っている。男らしさと言うより、地位とか立場のらしさ、その方が出てしまう。司:で
は、地位とか立場がなくなったら自分らしさが出てくるか。C:出てくると思う。自分らし

さってそういうもの。司:男らしさの中にいるほうが居心地がいいのではないか?自分らしさを求めていくと、しんどいと思う。知らないままに男らしさだけでいったほうが楽。しかし定年、リストラなどで現実に向き合う時が必ずくる。A:僕たちの時代は、嫁を働かすことは、男の活券にかかわるということだった。会社で出世する人の奥さんは家にいる。共稼ぎの人は会社の行事と一緒に参加できないから脱落した。D:それは出世するため。仕事出来る出来ないではない。得意先の接待をしたり、気配りができない奴はだめということになる。司:離婚した男は、家庭の管理もできないという発想と一緒に。A:だから家ぐるみ、取り込まれている。そういう人たちが今、リストラで追い出されている。D:家庭があって自分が働けると思う。C:10日間、リフレッシュ休暇をもらった。4泊5日で旅行に行った。残り5日、ちょうど梅雨の時、何もできない。これって、定年後どうなるのかとつくづく思った。ほんとに自分にとって、何があるのかと。趣味か、何かもたないと実感した。E:私は25年なので10日間のリフレッシュ休暇があったが捨てた。その間、一生懸命仕事をした。明日、自分がリストラされたとしても、その時の不安を何とか紛らわしたいと思った……しんどいですね。何で休まれないのか。アホやなあ。不安感があった。休暇とるのは、なまけもの。取らないのはアホ。仕事が忙しかった訳ではない。暇だったが、その次の仕事のことを考えて、勉強していた。A:与えられた臨時休暇さえ消化できてない。映画でも、もし見に行ったら誰かに会うと隠れたくなる。罪悪感かも。それなりに理由をつけないと、親が病気だとか言い訳しないと。E:あとでリストラされたときに、あの時に報奨休暇を取らなかったら、ひょっとしたらという後悔がでるのではないかという不安。司:だから休暇をとっても、とらなくてもしんどい。稼がなくても、稼いでもしんどい。E:自分のスケジュールくらい自分で管理できないのかと思う。A:企業は体面を保つために、こういう休暇もあると訴えているが実際は取りにくい。E:ボランティアみたいな甘いことをする奴は、ビジネスという厳しい世界でやっていけるような性格の人間ではないと、それだけで不適格の烙印を押される。休日も一応会社のために尽くすようになっている。辞められたらいいけど、辞められない。司:奥さんも辞めるなと言う。E:で、その話を帰って妻にはできない。聞いてくれる人があればいいが。カミさんに言えないのは、よけい塩を塗られる感じがするからさらに傷つく。

なぜ男性は自殺するのか

精神的自立が未熟A:そういう人たちに向けて、もう少しあなたの思いを話してくださいと言う呼びかけができるようなシステムをここがもてれば。「いのちの電話」のポスターを職業安定所の近所、パチンコ屋、地下鉄のホームに貼るとか。司:あ~、かけても良いんだと、ポスターを見て思ってもらえれば。A:寂しいところ、美しいところ、観光地で死ぬかと言うとそうではない、にぎやかなところでひっそり死ぬ。たくさん人がいるのに私を知っている人は誰もいない。中高年の自殺をくい止めるには、らしさを

認めてあげないとだめだと思う。そのらしさを認めない世の中になってきて、死ぬことを考える訳。持っている人に、らしさを捨てと言うのはだめ。司:認めたくえで、それを少しずつ解放してあげなければ。そうすると楽になる。D:人間、失うものがなくなったというのは、これは非常に強いと思う。どん底に落ちたときに、上を見られる人は自殺しなくてすむ。未だ下が見える人がたぶん自殺してしまう。未だ自分は落ちていくという不安がある。A:本当に失うものがなくなれば死ぬばいいと。失うものがないというものを持っている。その開き直りが良い。自殺する人に、今あなたは職がない状態にあるという現状認識を受け入れさすことが大事。その人はそこから未だ抜け切れていない。未だ社会で働いている人間であるわけ。そこから無職の人間に移り変わる段階。その段階をうまく渡してあげないと生きられない。司:同じように外圧を受けても死ぬ人と死なない人、それと男に多く、女に少ないのはなぜかと思う。同じようなことでも女性性は極端に言えば死なない。A:精神的自立はしているようでしてない。まだ未熟。いつまでも過去を引きずっている。感情を表に出さない。B:感情の抑制をすごく考える。司:だから、抑圧された感情が表に出たときいろんな行動に出る。暴力であったり自殺であったり。A:感情を小出しにしていたら、爆発することはない。

男の価値観

働くことは自分を捨てることA:男性は自分が出した予定どおりに生きなければととらわれてしまう。柔軟性に欠ける。司:そういう作られた価値観を脱ぎ捨てられない。がんじがらめになっていることを自覚して少しずつ変えていこうとか変わっていこうとすることを話してもらえたら。B:60歳の私の男らしさというのは客観的で、合理的な視点を持ち、泣き言を言わず、一人で耐え、特に女性に対して、庇護、本当は支配できる力を持っているのが一人前の男。私はまさしくそういうことで生きている。ところが、ある時点で、ちょっと自分勝手すぎる思いではないかと気づいた。もっと自由に見たら良いんじゃないかと。けれども、60歳代のマジョリティはだいたいこういう考えを持っていると思う。だから電話をかけてこない。俺はかけない。司:まさに言われている男らしさの中身。B:だから、それからの自由。司:つまり、自分らしく、ということ。B:そう。男らしさから自分らしさへと、男らしさというのは変化する。40代の時の自分らしさ、50代の時の自分らしさ、ほんとは自分らしさを追求すべきだと。司:自分らしく生きて良いと思っても、男らしくこうあるべきだと、ずーっと言われてきたので、とまどったり迷ったりしないか? B:抵抗することなくそういう風になってきているわけだからしんどくない。しかし、家庭は犠牲になっている。おまえの一生はよかったのかと誰かに問われたら頭抱えてしまう。そういう衝撃。もっと多面的にしてたらどうだろうという、気づきがあった。A:男にとって働くことは自分を捨てるということ。自分は自分の男らしさというものを持っているが、働いてる組織から見れば自分をもたれたら困る。歯車でないと困る。出世、それが男の生き甲斐。ところが定年退職、病気、リタイアの段階で初め

て己がわかる。それをどの機会で得るか。その自分を見いださないうちに死んでしまう人が多い。司：Aさんもそうだったのか？自分を取り戻したほうなのか？A：そう。私は自殺願望者だった。病気をしたために、出世コースから外れた。自分としては出世の夢があった。はずれて初めて外から見たときに、私の人生は何だったかと。口では家族を養うときれい事を言っているが、ほんとの自分ではなかった。そこへ到達するまでは苦しかった。私は見捨てられた、役に立たない人間と言うこと。私のときは家族の支えがあったから何とか持ちこたえた。もし、家族が支えられなかったら死ぬか、浮浪者になるかと言うことになる。男らしさと言うのは欺瞞。それに寄りかからないと生きていけない。そのとき、自分がなにかわかったような気がして、それから以後の仕事は力が抜けた。だから、自分の意見をどんどん言う感じ。人間らしく生きると言うこともつらいことと思うし、自分を忘れて男らしさで生きると言うこともつらいこと。中高音というのはその狭間にいる。リストラされてしまったあと、なにを糧にしていくのか。その糧が精神的なものにならないといけない。そういう役割を「いのちの電話」が果たせたら良いと思う。司：男らしさの価値観については女性にも共犯の部分があると思う。D：男らしさの中で、私はプライドは二種類あると思う。社会に認められるプライドと自分自身が認めるプライドと。自分自身が認めるプライドを確立すればすごく楽になると思う。私は男らしさというのをそれほど意識して生きてきていない。自然とボランティアの世界に入り込める自分がある。そういう意味ではしんどさというのは感じていない。B：物事を考える時にやっぱり挫折感が引き金になる。D：男社会だけだったら自分らしさを隠した。だけど男女が対等に並ぼうと思ったら、自分らしさを出したほうが楽。私は、母親の胸に顔をうずめて泣くってというのは、すごく楽ではないかと思う。母親の代表として他の女性ということもあり得る。相手が男だったら、そこまで甘えて入り込めない。本当に泣けるのは、女性。B：僕は、それもできない。D：そう思う。僕も実際できるかといえば、できないものがある。B：僕は、しょうとも思わない。

男らしくから自分らしく

男も楽に、女も楽に司：Dさんはそんなにしんどくなかったというのは自分らしく生きて、自分を自由にしていけたのか。D：自由とまではいかないけれど、楽だったと思う。自分自身として納得していたと思う。自分は人みたいに出世しなくてもいい、これはこれで俺の生き方と言うようなものを持っていたが、競争に勝たないといけないという思いはあった。けれど、最後を走っていたとして、たとえば、途中で回れ右と言われたら一番先に帰れる。そういう考えを自分の中に取り入れることですごく楽になっていった。司：それこそ発想の転換ができるということ。A：今までは、らしさというのはそれぞれ役割分担をやっていた。発想の転換によって生き方も変わってくる。司：女も男も客観的な部分と主観的な部分もあって良いし、合理的な部分もあってよい。弱音を吐いても良いし、我慢するところもあって良い。それも個人の資質で、強い人もあるし弱い人

もある。相方自立していい関係を保てる。電話をかけてこないまでも、仲間内で楽に話せるようにならないか。男性が楽にならないと女性も楽にならない、それでバランスが取れる。D:まだ中高年の持っている男の楽というものは、精神的楽に届いていない。司:この座談会によって、いくらかあなたたちが男らしさから人間らしさへと心を解放できたらと思う。文責:広報編集チーム

以上男性相談員による本音トーク「男のしんどさって？」からでした

第18回公開講座男のしんどさもわかってほしい講師中村彰氏(メンズセンター運営委員会座長)

2月26日(土)、クレオ大阪西において開催された。“男らしさ”という価値観に縛られて生き苦しい思いをしている男達のしんどさを講師の体験を交えながら講演された内容から抜粋した。

一人の男性との出会い震災から半年後、被災した男性が氏が主催している井戸端会議に参加し、息子を失った悲しみを話した。それは家族共通のものであったが彼が一番ダメージを受けていた。彼は何もできない状態に陥っていることを恥としてとらえ、自らを責めていた。またそのつらい気持ちを妻に語るができなかった。妻から弱い男と見下されないかと不安だったからである。かつて氏はこの彼と同じ思いを職場で人事異動の時に味わっていた。妻に心配をかけたくない、また自分の落ち込んでいる姿を見せたくないためにつらい思いを一人で背負い込んでしまった。そこには一番親しいはずの人に自分をさらけだせない男の姿があった。

なぜコミュニケーションが下手か例えば男の子が転んだ時、ほとんどの大人達が「ぼく、男の子でしょう」という。これは裏に「男の子は、そんなことくらいで泣いていてはダメ」というメッセージが隠されている。そして男の子は、弱い部分を表に出すことはダメでそれを隠すという学習をしていくことになる。このようにして男は喜怒哀楽を出してはいけないということを家庭や社会での教育によってすり込まれ、その結果感情を伝えるコミュニケーション下手となっていくのである。語ることは自分の思いを整理し認めていく作業である。すなわちコミュニケーション下手は自分を認めていく作業が下手な男へとになっていく。やがて職場や人間関係で追い込まれた時、妻や恋人への暴力、過労死、過労自殺へとになっていくのではないだろうか。

地域との関係氏にとって生まれ育った地域は、仕事の明け暮れによってだんだん目が向かない場所となっていった。また定年後の男性達との出会いの中で、過去の

肩書きで自己紹介をする男達。地位が上の者ほど過去を引きずっている。そこには過去に縛られ、裸の付き合いができない男達がいた。

死後離婚を望む妻メンズ・リブとの関わりは、ある女性グループとの出会いがきっかけだった。そのグループがお墓についてアンケートをしたときの回答に、「夫の田舎のお墓に入るのはイヤ」「夫と同じお墓に入るのはイヤ」というのがあった。同じアンケートを夫達にしたところ「同じお墓にはいるのは当たり前」との回答だった。同じ家庭で暮らしながら妻は問題あり、夫はなしととらえている。これは何を意味しているのか。夫は仕事の連続で妻と向かい合う時間がなく、その結果家庭の中に溝を作っている。

問い直される世界本来身近で信頼できるはずの妻や、住んでいる地域との関係を疎遠にしてしまう仕事との関わり方を問い直す必要がある。そして趣味やボランティアのための時間や職場以外での人間関係が広がるような生き方ができるために、労働、経済、教育界に働きかけていく。そして一人一人の生き方を問い直す時が来ているのではないか。長い間不自由を強要されていた女性達が声を上げてから数十年。痛みが和らぐことはあってもなくなるまでには程遠い気がする。しかし強要する側にもそれ故に、とらわれているしんどさがあった。弱音を吐き、しんどいと声を上げ始めた男達に、共に人間らしく生きたいと願う仲間としてエールを送りたい。A.I

認定式:感謝式行われる

第34期電話相談員認定式と、勤続20年・10年感謝式が3月11日(土)午後2時から聖贖主教会で行なわれました。34期認定者42名、勤続20年5名、勤続10年14名にそれぞれ認定証と感謝状が贈られました。各期の方々に今の思いを寄せていただきました。

20年たって今考える Y.M

私が22名の仲間と共に電話相談員として認定を受けたのは、昭和55年3月29日に関西いのちの電話の社会福祉法人認可を祝う会の中で行なわれました。その折りの宇野徹理事長のご挨拶は、この事業の社会的責任を強調され参会者は意気軒昂、新たな使命に燃えていらっしゃいました。なりたての相談員も、否応なしに捲き込まれておりました。当時の社会は相談窓口が少なかったので、いのちの電話への相談者も多属で、問題も多様でした。相談員は現在の4分の3足らずですが、受信件数は現

在と大差ないなど、大変忙しく過ごしました。その中で、さまざまな出会いをし、様々な別れもありました。多くの仲間に支えられ育てていただきました。なによりも電話線を通じて、話しを聴かせて下さったコーラーの方々から、数多く学ばせていただきました。20年勤続感謝状をいただきましたが、事なく勤務させていただいたお礼を、私から申し上げたい気持ちであります。昨年ライフライン国際大会に参加する機会を得ました。地球の南端の都市ケープタウンに集った各国からの参加者は、それぞれの国情の中で頑張っているらしいです。特に開催国の南アフリカの、厳しい情勢の中で活動を見聞きして、大いに考えさせられました。恵まれた日本ではありますが、社会状況は平安とは言えない状態が続いています。この中で私達は隣人として、温かく聴いているだけでよいのだろうか……と考えております。

思い出 25 期 T . A

「いのちの電話」に関わり初めてからもう10年がたちます。面接の時「なぜ「いのちの電話」をやりたいのですか」と聞かれた私は「人のために役にたちたいと思います」と答えたことがつい昨日のこのように思い出され、今思うと恥ずかしく感じています。私が誰かの役にたったのではなく、「いのちの電話」が私のために役にたったのです。「いのちの電話」を通して私自身が変わったのです。私の性格が完璧主義で、すべてのことに対して完全にしないと自分を許せなかったのですが、ある時一人のカウンセラーの先生のアドバイスで「完全な人間は一人もいないので、まちがいをしてもあたりまえです」と言われてから少しずつ私の内で変化が起き始めたのです。最初は何回も繰り返して理解しようと思っていましたが、なかなか実行はできませんでした。しかし悩んでいらっしゃる方に電話で応対しているうちに、少しずつ分かるようになってきたのです。そして毎日の生活の中で自分が失敗した時に、自分を許すことができるようになり、すごく楽な気持ちになりました。「いのちの電話」をしていなかったら、私は今とは違う人間になっていたと思います。今は、人の悩みを自分の悩みとして心で一生懸命に聴きたいと思います。時々あまりにも一生懸命になりすぎて自分自身を出しすぎる時もありますが、相手の方々には心を開いて下さることを本当に感謝しています。この10年間を通してたくさんのお出会いもいただき心の中は感謝でいっぱいです。後10年は頑張りたいのですが、どうなるでしょうか。

私にとっての認定式 Y . U

“共感”。電話を聴く上で何よりも大切なこと。そして、相手の話の内容にとらわれず気持ちに耳を囁けることが大切だということを学び、なるほどとわかったような気になっていた。でもいざ電話を取つてみると、いい解決法を見出さなければ、とか、ノーアイデアをしなければ、といった気持ちが無意識に働いて相手の気持ちとはかけ離れ

た発言をしていることが多かった。「共感々々」と呪文のように唱えながらブースに入ったこともあった。うまく、かす、「自分には電話を受ける素質が備わっていないのではないか。」と悩んだこともあった。そんな時スーパーパイザーから、「自分の中に起きている気持ちを素直に受け止めそれを伝えればいい(とアドバイスを受け、共感の主体が自分自身の軒あるのだと初めて気づいた。改めて自分の内面を見つめたとき、職業として 役割の枠に自分を押しこめ、常に、こうあるべき、こうすべき、と考え、率直な自分の感情に向き合・ことを避けていた。長年人と関わる仕事をしてきて自分は相手の立場に立って物事を考えることができ、る人間だと錯覚していたようだ。自分の気持ちを、ちゃんと受け止め、認めることなしに真に他人にやさしく接することはできない。二年間かかってやっ “自分にやさしくある”ことの意味を感じとることができたように思う。電話相談という山のふもと亡やっとたどりつくことができた私にとって、“認定の持つ意味は非常に大きい。気負わず、まわりの景色も楽しみながらゆっくりと歩んでいきたいと思っている。

相談員ノート娘について思うこと 33 期 I.M

養成講座や研修グループの事例から学んだことが、自分に当てはまり、ハッとすることがあります。私には、高三の息子と中三の娘がいます。夫から、息子と娘に接する時の態度や言葉遣いが、ずいぶん違くと、時々、指摘を受けます。そんなことはないかと否定はするのですが、心の片隅で、娘の態度や言葉に何かしらイライラを感じていたことは知っていました。最近、そのイライラの原因が私自身にあることに気がついたのです。親に対して、生意気な態度で反抗していた中学生時代の私と、今の娘の言動が、とても、よく似ていることが見えてきたのです。娘を観ていると、あのころ、訳もなく湧き上がってきた反発心、理不尽な言動をしていた自分への苛立ち、そんな複雑な思いが、私の心の中に甦ってきて、イライラを起こさせていたようです。そのことに、私自身が気がついてから、娘に対する見方や接し方が、少しずつ変わってきたような気がします。娘を愛しく感じる瞬間が多くなってきました。以前は、娘の好きになれないところを、母親にそっくりだと言われると、嫌で嫌でたまらなかったのですが、今は、昔の自分に接しているような気持ちになって、ちょっぴり懐かしく思えるようになりました。あの頃には、整理できなかつた心の中が、時を経て、今なら分かるような気がするのです。そのことが、娘と私の心をつなげてくれているような気持ちにさせてくれます。養成講座や研修グループで学ぶことがなかったなら、こんなふうに自分と娘を見つめることはできなかつたと思うのです。夫は単身赴任中。四月からは、東京で大学生活を送る息子。しばらくは、娘と二人で過ごす時間が多くなります。思春期を迎えて、精神的にも大きく成長していく娘と、何とかうまくつき合っていけそうな気がします。

自然に学ぶオジギソウ

含羞草と書く豆科の小低木、園芸上は一年草。眠り草、ミモザと呼ばれているもので高さは30センチ位。原産はブラジルで天保年間に日本に入ってきたと言われる。一部の食虫植物と同じようにオジギソウは刺激に敏感で、葉に触られたり、温度や光線が急激に変化すると葉をしばませ垂れ下がってしまう。しばらくそのままにしておくと又元に戻る虫が身を守るような働きをする植物。同じ豆科で近い種にネムノキ(10メートルくらいになる)は、雨の日や夜は葉を閉じるが、時間をかけて観察しないと働きを感じられない。植物は動かないものと思っている小さな子どもが初めてこの植物にふれた時の驚きと興味はやがて感動へとつながるものであろう。電話相談を受けていても思わぬところで相談者が反応し、心を閉ざしてしまう。早く元に戻したい気持ちになるが、このような時焦っても相談者は心を開いてくれない。温かい心と、静かに待つゆとりを持たなければ電話相談も成り立たないだろう。光と熱の自然環境がオジギソウを元に戻すように。ネムノキと同じように頬紅を塗る刷毛のような薄紅色の花をつける夏までゆっくりと見つめてみよう。電話相談のヒントをつかむことができるかもしれない。相談員K.T

季節の俳句 - 十三句会より - 選者磯崎清平成 10 年 9 月、十三句会ができました。

以来この間の投句数は 200 句を超えています。互選句のうち春の句を紹介します。

春日や駅舎に響く加賀ことば 紀子 紅梅のつぼみのごとく嫁に行き 末子

みはるかすつつじの谷へ深呼吸 洋史子 老いてなお雛を飾りて語りけり 公子

くりかえすいのちなりけり木の芽ふく 遊仙 ガングロの厚底靴に春の風 寿美子

- 相談電話受信件数 -

12 月受信件数 1,646 件相談員数(延)480 人

1 月受信件数 1,646 件相談員数(延)488 人

2月受信件数 1,574 件相談員数(延)4895 人

ありがとうございました

酒井哲男様 13 万円株式会社藤木工務店様 10 万円脇坂尚子様 30 万円

NTT 西日本大阪支店様 10 万円大阪東淀川-列-クラブ様 20 万円日立親切会様 20 万円

山村幸明様 20 万円西日本電信電話株式会社様 10 万円大阪ボランティア活動振興基金様 8 万円

編集後記ピカピカの 1 年生らしい中学生が歩いている。「毎日重いカバンを持ち制服を着て、学校へ通うだけで、彼等には大変な事だから、誉めてあげて下さい」。息子が中学生になった時の担任の先生の言葉を思い出した。すぐ多くを望み過剰に期待しがちな大人達。潜ぎ出してゆく海が、どうぞ平穏であります様に。S・S

社会福祉法人関西いのちの電話

〒532-0028 大阪市淀川区十三元今里 3-1-72

TEL.06-6308-6868FAX.06-6308-6180

発行人酒井哲男

編集報編集チーム